# 「男、突っ走る！」

第63回

第一稿

作・壽倉　雅

## 登場人物

| | | |
|---|---|---|
| 木内　雅也（22） | 『オフィスツリーイン』代表 | |
| 國村　英作（51） | まちづくり会社社長 | |
| 伊藤　理沙（32） | 若手起業家 | |
| 大島　幸次（51） | 広告制作会社社長 | |
| 橋崎　悟（47） | ＷＥＢ会社社長 | |
| 国枝　佐代子（57） | 市民映画プロデューサー | |
| 田所　俊子（61） | 市民映画プロデューサー | |

1

『スタイル・タウン』・事務所

雅也、國村、伊藤、大島、橋崎が編集会議をしている。

N「シニア向けフリーペーパーの発行に向けて、僕は週一回の編集会議に参加していました。今では、文章執筆をした経験から、会議の議事録作成も担当することになっていました」

國村「では、今日の編集会議終わりたいと思います。来週も、朝九時半からよろしくお願いします」

一同「よろしくお願いします」

と、去っていく伊藤、大島、橋崎――

大島が立ち止まると、

大島「あ、木内君」

雅也「はい」

大島「今日って、三時ぐらい空いてる？」

雅也「ええ、大丈夫ですけど」

大島「俺の会社来てくれないかな。すぐそこなんだけど」

雅也「はい、分かりました」
大島「よろしく、ちょっと仕事の相談したくて」
雅也「分かりました、お願いします」
大島「それじゃあ（と出ていく）」
國村「良かったね、木内君。大島さんから仕事もらえそうで」
雅也「ありがたい話ですよ。まだ事業初めて三ヶ月も経ってないのに、こんな風に言っていただけて」
國村「どう、せっかくだからランチ一緒に」
雅也「ぜひ！」

2　中華料理屋

雅也と國村が、ラーメンやチャーハンを食べている。

國村「木内君が来てくれるようになってから、編集会議が明るくなったような気がするよ。やっぱり新入社員同然の若い子が来ると、エネルギーもらうのかな」

雅也「そんなことありませんよ。僕なんて、よく年齢不詳なんて言われるんですから。専門学校の時、友達から『十四歳にも見えるし、四十四歳にも見えるよな』なんて言われたこともあるんですから」

國村「それは、リアクションに困るね」

雅也「ですよね。まあ、そういう個性的な友達と一緒にいたことが多かったので」

國村「雑誌編集を専門学校でやってたって言ったけど、どんなことしてたの？」

雅也「僕が通ってた専門学校は、名古屋の栄にあったんですけど、あのあたりは昔の名残があって、結構歴史的な建造物や歴史とゆかりの建物や神社があったんです。それで、栄周辺の歴史をテーマにした地域雑誌を作ることになって。一年に一回発行するんですけど、僕が入学する一年前に、その雑誌が創刊されて、僕が携わるようになったにには二号目からなんです。当時は授業を担当してる講師の先生が編集長や副編集長

を担当してたんですけど、僕が二年生になったとき、方針が変わって学生主体にって話になったです。そしたらいきなり僕が編集長だって言われて」

國村「一年携わって、二年目でいきなり編集長？」

雅也「そうなんです。右も左も分からないっていうのは、こういう状態のことを言うんだなと思って。とにかく先生にいろいろ聞いたんですけど、それでも分からないことがたくさんあって、結構大変でした。それで何とか三号目ができたんですけど、三年生になっても他に編集長ができる人がいなくて、僕が結局二年の任期で編集長をやったんです」

國村「じゃあ、専門学校に通っている間に、三冊分作ったんだ」

雅也「自分でよくやったなって思います。それに、今回このプロジェクトに携わらせていただくようになってから実感したのは、

スポンサーの確保です。専門学校の時は、学校の予算で発行してたんです。まあ、一年に一回とはいえ、ある程度の掲載内容を決めた台割や企画書を先生に配って、先生たちの前でプレゼンをするんです。形式上のものとはいえ、やっぱり学校の予算を使ってやるものなので、ちゃんとした企画にしなきゃいけないっていう気持ちはありました。でも、本来こういうフリーペーパーっていうのはスポンサーの存在があるから資金調達ができて、そこでいろいろ経費を賄うわけじゃありませんか。なので、学校でやったものとは全然違うなって、毎回編集会議に参加して学ぶことがたくさんあります」

國村「木内君にとって、ここが良い勉強の場になってくれてるのは嬉しいね。議事録だってお願いするようなことになっちゃったけど、やっぱり人に見せる文章を勉強してきたからだろうけど、すごくわかりやすく

整理されて見やすいよ」

雅也「ありがとうございます。せっかくなら、自分のスキルを思いきり発揮しようと思って」

國村「この間、大島さんとも話してたんだよ。木内君っていう専属のライターが編集部にいることは心強いって。大島さんの会社でも、専任でライターが何人かいらっしゃるんだよ」

雅也「今日この後、大島さんの会社行きますけど、そんなに大きい会社なんですか？」

國村「確か、今社員さんは十一人って言ってたかな。大島さんが社長で、昔から仕事仲間だった方が取締役をやってて、その方はウェブを専門としてらっしゃるんだよ。他にもグラフィックデザイナーとイラストレーター、それから一人営業の人がいるって言ってたかな」

雅也「グラフィックとイラストか……何だか、専門学校の頃を思いだします」

國村「どんな学生生活だったの？」
雅也「僕、三年間皆勤賞だったんですよ」
國村「なかなか専門学校で皆勤ってすごいね」
雅也「それぐらい学校が好きだったんです。
学校祭ではお化け屋敷やったり、さっき話した雑誌編集もやって、あとはイベントの実行委員会とか、新入生歓迎会の実行委員長とか、オープンキャンパスをスタッフをやったり、後はプライベートで友達とバーベキューやったり飲み会やったりと、とにかく自由奔放にやってました」
國村「結構積極的だったんだね。まあ、そういうやる気があるから、卒業してすぐに自分の腕でやろうって思ったんだろうね」
雅也「正直、学校に来る求人に、『ライター』っていうのがなかったんです。もともと脚本を書きたくて専門学校に入学して、それからいろんな経験させてもらいました。せっかく得たスキルは、早いうちに発揮しなきゃと思って。先輩たちは、俗にいう一般

就職で、文章を書く仕事に就いた先輩がいなかったんです。僕、『前例がなかったら自分で作っちゃえ』がモットーなんですよ。だから、試行錯誤の繰り返しですけど、それでも自分でとにかく動いていこうと思って」

國村「そういうやる気が、大島さんにも伝わったんじゃないかな。せっかくの機会なんだから、大島さんとも良い仕事するんだよ」

雅也「はい」

3　大島の会社・社長室

雅也と大島が話している。

大島「悪かったね、急に来てもらっちゃって」

雅也「いえいえ」

大島「仕事の相談っていうのはね、案内パンフレットの原稿を書いてほしくて」

雅也「案内パンフレットですか？」

大島「ああ。すぐ隣に、レンガ造りの四階建ての建物あるだろ」

雅也「はい」

大島「あそこは、中央交流センターと言って、つい最近オープンした複合公共施設なんだよ。（と雅也に資料を見せながら）一階から地下にかけては大きなホールがあって、二階から四階は図書館になってるんだ。それから、コインパーキングを間に挟んだ反対側はカルチャースクールとスーパーマーケットが入ってる。この案内パンフレットには、それぞれの簡単な概要を書くんだけど、その原稿をぜひ書いてもらえないかと思って。大まかなことは、この資料に書いてある」

雅也「ありがとうございます。ぜひ、よろしくお願いします。現地見に行っても大丈夫ですか？」

大島「もちろん。やっぱり木内君もあれか、直接現場見ないと書けないタイプか？」

雅也「まあ、基本的には」

大島「分かるな。俺もさ、大学卒業してから

最初に就職したのが、名古屋の広告代理店で、そこが発行元になる新聞の記者をやってたんだよ。だから俺も、書く仕事の時は、常に現場に足を運ぶようにしてるんだよ」

雅也「専門学校で、コピーライターの先生が仰ってました。『取材とは、材料を取ってくると書くから、取材なんだ』って」

大島「良いこと言う先生だな。そんな先生のもとで勉強してきた木内君なら、そりゃ良い原稿書いてきてくれるんだろうな」

雅也「やめてくださいよ、プレッシャーなんですから」

大島「木内君見てると、昔の俺を思い出すんだよ。せっかく頑張ってるなら、ひたすら突き進んでほしいと思ってさ」

雅也「ありがとうございます」

大島「また何か分からないことがあったら、いつでも連絡してくれ。よろしく頼むよ」

雅也「はい、よろしくお願いします」

4　中央交流センター・受付

雅也が職員に話を聞いている。

N「大島さんからいただいた仕事のため、僕は早速現地に足を運び、その場所の雰囲気をメモしたり、職員さんに直接話を伺いながら、まさしく材料を取る『取材』をしてきました」

5　木内家・雅也の部屋（夜）

資料やメモを見ながら、パソコンに向かって原稿を書いている雅也。

N「そして、そこからしばらくの間は、中央交流センターの案内パンフレットの原稿を書く時間が永遠と続きました。それと同時に、フリーペーパーのプロジェクトも、少しずつ動いていました」

6　『スタイル・タウン』・事務所

雅也、國村、伊藤、大島、橋崎が編集会議をしている。

伊藤「サポーター会ですか？」

大島「せっかく地域のシニアに向けての情報発信をするんだったら、それこそシニアの人から話を聞く時間も必要だと思うんだ。それに、この商店街や地域を巻き込んで配布をするんだったら、まずはこのフリーペーパーが発行されるということを宣伝して、いろんな人に知ってもらう必要があると思うんだ」

橋崎「簡単に言うと、異業種交流会みたいなもんですか？」

大島「まあそんな感じだね。それこそ、シニア向けだったら、このあたりの医療従事者や社会福祉協議会の人に来てもらうのもありだと思う。シニアに関するネタを持ってる、ある意味では専門家なんだから」

雅也「確かに、そういう方たちからの意見を反映すれば、より専門的な雑誌になるかもしれないですよね」

國村「早速、日程決めて、宣伝しますか」

大島「俺も、今度の市民まちづくり会議の時に、宣伝しとくよ。こういうサポーター会とか、人が集まる場所で意見交換することが好きな人がいるから、多分来ると思う」

國村「ぜひお願いします」

7　同場所（二週間後）

N「その二週間後の日曜日、『サポーター会』が開催され、地元の社会福祉協議会の職員の方や医療法人格を持つ地元の病院に勤務する作業療法士などの医療従事者の方も参加された」

お菓子や飲み物が用意され、参加者たちが談笑している――雅也、國村、伊藤、大島、橋崎も、それぞれ名刺交換をしながら交流をしている。

と、二人の女性、国枝佐代子（57）と田所俊子（61）が入ってくる。

国枝「こんにちは」

大島「おお、二人とも待ってたよ」

田所「大島さんから話聞いて、ちょっと楽し
そうだと思って。私も、定年迎えて、もう
すぐシニアの仲間入りだから」
大島「何言ってんだよ、俊子さんなんて全然
元気じゃねえか」
田所「アクティブシニアって言うみたいよ」
雅也、国枝と田所に気づくと、
雅也「大島さん、この方たち……」
大島「ああ、紹介するよ。国枝佐代子さんと、
田所俊子さん。二人とも、二年前にこのあ
たりを舞台にして作った市民映画のプロデ
ューサーなんだ」
雅也「市民映画？」
国枝「（名刺を渡して）初めまして、国枝と
言います」
田所「（名刺を渡して）田所です」
雅也「（名刺を受け取ると自身の名刺を渡し）
ライターをしている木内と申します」
国枝「ライター？」
大島「このフリーペーパーの専属ライターを

お願いしてるんだ。それに、うちで引き受けた、中央交流センターの案内パンフレットの原稿もお願いしてる」

田所「へえ、こんな子がいたんだ」

国枝「（雅也の名刺を見て）え、脚本書いてるんですか？」

雅也「ええ、まだYouTubeドラマしか書いてませんけど」

国枝「こんなところで、脚本を書いてる人に会えるなんて思わなかったわ。私たちね、二年前にこの地域を舞台にした市民映画を作ったのよ。ぜひ見てほしいわ」

雅也「僕なんかでよろしければ」

大島「この子、三月まで専門学生だったんだよ。在学中に脚本デビューして、そのまま今は個人事務所で頑張ってるんだ。もしかしたら、いずれ二人と何か一緒にやることがあるかもな」

田所「そうよね。専門卒業してすぐってことは、まだ二十歳とかそれぐらいでしょ。こ

んな若い子が頑張ってるんだもの、私たちも負けてられないわね」

国枝「またぜひゆっくりお話聞かせてください」

雅也「はい」

N「この『サポーター会』の翌週に開催された編集会議で、スポンサー獲得のための営業ツールにも使えるサンプルとして、一回目の雑誌は創刊準備号という形で発行することが決まり、早速掲載内容の検討に入った」

8　木内家・雅也の部屋（夜）

資料やメモを見ながら、パソコンに向かって原稿を書いている雅也――と、スマホに着信がかかってくる。

雅也「（電話に出て）もしもし。山岡さん、お疲れ様です。はい、はい……そうですか、いよいよ明日からクランクインですか。いえいえ、とんでもない。でも良かったです

ね、何とかここまで来れて。そうですよね、明日こっちも天気悪いんですよ。てるてる坊主でも作りましょうか。（と笑うと）昔から、晴れてほしいタイミングの時には、てるてる坊主作るようにしてるんですよ。最初から雨だと、スタッフもキャストの皆さんもやる気下がっちゃうじゃありませんか。まあ、かえって暑すぎるのも撮影的に大変なので良くないとは思いますけど。はい、はい……そうですね、一度はせっかくなので撮影現場にお邪魔できればと思ってますけど。来月、そうですね七月の二十日前後あたりでお伺いできればと。よろしいですか？　分かりました、ではまたご連絡お待ちしております。スタッフやキャストの皆さんにくれぐれもよろしくお伝えください。では、失礼します（と電話を切る）」

再び、資料を見ながらパソコンで原稿を書き始める雅也。

9　『スタイル・タウン』・事務所

雅也、國村、伊藤、大島、橋崎が編集会議をしている。

雅也「じゃあ、一号目というよりかは、創刊準備号って形にするんですか？」

伊藤「スポンサーへの営業のために、実際にどういうものなのか形にしたほうが良いと思うんです。なので、サンプルに近い形で創刊準備号をまずは作って、それを使って営業かけていこうかと思います」

橋崎「ホームページでも、バックナンバーが見れるような仕組みを作ってるので、そこも創刊準備号に直しておきます」

大島「創刊準備号とはいえ、ちゃんとした雑誌にするとなると、掲載内容もそれなりにしないといけないだろうし、インフォメーションや広告枠のページも、同じような体裁にする必要があるぞ」

國村「体裁のために、がっつり取材したり巻頭企画立てるぐらいなら、なるべく規模は

小さいほうが良いですよね」

大島「経験上、実質的なエピソードゼロになる創刊準備号なら、編集長や発行人の対談を大きく載せることもできるけどな」

國村「じゃあ、僕と理沙ちゃんだね」

伊藤「私たちだけの対談だと、内容薄くならないですか？」

大島「じゃああれだな、編集長と発行人、それからシニアの代表、医療従事者の代表、社会福祉協議会の職員っていうそれぞれの視点からいろいろ語ってもらう座談会だな。それなら、ページ数もそれなりに確保できる。（と雅也を見ながら）まあ対談と違って、複数の人がベラベラといろんなこと喋るから、記事にするのは大変かもしれないが」

雅也「いえ、僕なら大丈夫です。取材記事とか対談記事とか、専門学校時代に書いてきましたから」

橋崎「じゃあ決まりですかね」

國村「座談会の参加者、それから日程と場所を決めないといけないですね」

大島「ちょうど、交流センターがオープンしたばっかだ。あそこの和室なら、雰囲気が出て良いと思う。あ、カメラマンのスケジュール抑えなきゃな。日程決まったら、俺から連絡しとくよ」

雅也、メモ帳に次々とメモをしていく。

N「掲載内容が決まり、それに向けて動いていくその過程は、専門学校時代を彷彿とさせ、いつの間にかこのプロジェクトに携わることが楽しくなっていました」

つづく